洲訪古今抄

再撰貞享式

自之　三

中村俊定文庫
文庫 18
206
3

宮内省圖書寮

再撰貞享式　目録

恋句北事

たゝしく我国の恋は天の原行の詞より
八雲の妻ゆゑよりて大和言葉をもてあそ
ひ代々の帝王撰集第十恋部をもてはし
めとして連歌百式より誹諧のちかきに
至て恋の句とあれども歌より多句
たゝむもちろん我家の詞をもて歌
のさまかりそめにもちかはんとい

平村文庫

始てこの詞の名目なし者句と意の
姿体あるを例の詞と思ひたるは
他門より意と百とを拾ひて戸の内にある
〻意を作陽の石部より一を加へて言葉
をこしたる物の作りあれいこるより句を
時をくらひて意と一句を拾ひきたりあり
まるを中古は詞なるは以前の歌を下部と
作りしを歌を二句ありしいんをとき物語
いかにてを設あり以やや他語の活撥ちらいまく
連言は艶詞を離て人体の物をとはなむ

てをれいをとい物知らをあをれおいをとり
をかをいまりをはかをくりはくき言のををあるを
をりをと今の他語をを意をかるをを句をんとを
をおのをるをの詞とををいを連をのををのら
をりをを他をを例の手詠をを文字者ア
の耳ををりをはををををををををををん
をれをと中古は他語をを部詠の要を名ををる
をん返ををくを意の或用を他語を部語を詠
をて他門を對て論ををををををを
事を云へ再撰をるに意の一條へ今式の大

まして惑と云ふまで　按ずるに此篇の格のさまを
いひてこゝろえ未熟の者はかたかるべしといはむ
されば詞の無を子にてあれど人の思ひは句に
あるなれば其句よりむかうつきされど句移りは氣象て
それをこゝろよく先そへには此の附合は本來養情場の
節にて起句を起てらせば第の意をさし成や此五截
と云ふ句に養情場の本意にあらず腰と
居んとて是より此腰(コシ)を掃おろすにあしより
起ちゐる人はあれは折節の手ぬぐひを萬さうけ
てぬぐひ類を作りかへるに大工木挽の道具

て袖の色つきさぬるといふ句は作者此度もとて
お針のそゝいと柳はんと云ふ起情の所作の業
して見へるやおそろしね物の此流れにあつて只それ
傳聞中此言の氣象に床の前の寧(イサヤ)世川の
いさゝかね都を見ゝにあしさゝれはあるの作者
まんがゝて其心を惑はれとし後の作者の眼力
よりてハと惑の所の情とゝこれハ證と
私と此句とありて思を遣て云句あれとしふ
一しなりと所の隔方に起情を以其の一
て聞るおの此二句とかつぎて後の一句まで

附句なり或ハ前句の云句とあしらひて其前句
を附る句あり今ハ云ふ句をハ嫌ひ其語勢の一句
に男と女此二句を附れハ手裏に分ちて其の
其家を善悪の新造（サツコ子）新婦とうるさきもかく
其様の句ハ此模様なれし附句ハ五くひて悪と
なされハ恋を一句して捨て置とにて作者の
口訣とすけりいたる可し

○季節の障る物の事

むかしより季節の物を外あさる敏も其集にも秋冬

てあつかひて春も冬なるといへハ秋冬の際まされとも
加減されと謂るるハ四季をくくりて多きを減し
少きを増さんハ甚重宝の捨としてあらたむへし○人
の気なるへし或もや古来の二季を沿る地へハ気入
出処の表わり誹諧出入の表わりおわりといへハ行逆
といひて来るを秋とといひれとも今此誹諧の省略
よるハ秋季を流れて秋とある来季を流れ
いまた来るを今へともいふハあるを気入出処あり
てハ附句秋なるハ秋なるへし冬季と此季なるを流る
るを皆く此削を数ふへきやおそるへ○と遠の

ことよりし二季にわたりて用ひられしこよみの色それ
ともまゐるとハ只秋にあり帰るとハ只春にかぎれ
わけ、さるとて蕭句と帰来のことゝされて長秋
の二季にて作れる也一し中にも標準ある物ある也。
菊以て其も一至ぬりても山茶花は冬春梨花也。
あるは秋のかぎる扇あれされバこれらハ帰るとも
行も所にて春のかぎるも用ひし駒。帰るを渡して
まぬあれし作りとらしにて秋に用ひきや或ハ鵺を鸛。鵙鶻
のまねり周。白頬。白鶺鴒。鶚胡。鶲鵐。鵙とてまれハ
一句もあれいえ新しさるに一く春秋の季に作れ

てる帰来の字とことをこそとも時にきりよる事あるし
あるへし而も木啄。とて春にまた秋冬の季
とも以ふ一にれも梅もしむきてれるてまも秋もあるべし
あるとも鷽と鶲の二つも古哥の詠も催されバ
きれバ付れても冬のあるにて初をあるへし其外ニ季ハ
まつわ捌も祢。の鰹。のとても秋の字とひをを
秋をぬれてても秋にあるへし其うちに代の武用より
雨。にとにおきて松掛。をとみとも作るも別れとありても
公の卿によく秋のかゝれ作れる也一し掛まるに。二季な
の為に申あれハ色葉にする人ハ川。柳と明に遊ふる

かのうの道遠あれて川野のと云てはてあり
ひ遠とて花はなかりしかやはなの書用と諸とい
まとを摘菜のあるしより秋と菊野のあるい
ありて法して春秋の二用あり川野い
きして立秋の二用あり古歌に花野と云事は
海くまて野花留人と云事は和哥のひとゆくて
まと秋と北諸あれと例は能諸の説より諸と
まとをよりて春とまくの花と諸と一く
秋いは秋より色つよくて春のはなとまとへまれい
侍作の説をとれ分れて花野と秋の一事は

家也一一ゆく嗜者とはまあれとこれは
能諸の私あるく説の諸と信とは一に川野の
名あるく物。爾とこまは北用ありて秋の名作
ようまりて第の第作とうあれて物用事
のあれまきあるく秋と北二事は
ら例く説の諸とんとは一事のかれかく
のとくいうは二なれ家諸より一世の用作は
へまとれはしは古和のこまは塔あれ第一は節供
あるめと一句とあれて新と句事は用
あれいの名字とかはよとれとは節供とは世は

れ和の二用ありて他諸こんよりも名月あれいこ事
こゝにてもこゝ事ゝ用一一こゝ事ゝを表菓菓
をもて節供の名月とあるを取て春秋に桂花
の表嫁お月く嘗年をこゝ[illegible]かゝん
うれゝと事然のゝ月をこゝ或を郎と菊の
こゝ古物の名事ゝ匂編こゝ源こゝ上下
のこゝをこゝ[illegible]こゝ[illegible]こゝ
こゝ錆るこゝひこゝ事ゝ秋の美おあれこゝ
首法こゝる時こゝ[illegible]こゝ
こゝ月[illegible]こゝ事ゝ[illegible]こゝ

のれ事れこゝれもこゝ北名月こゝ四事ゝ北
屋おこゝをこゝ[illegible]こゝ[illegible]こゝ
秋こゝ[illegible]こゝ[illegible]こゝ[illegible]こゝ
のこゝ名月あこゝ[illegible]こゝ諸社の陰時
北用こゝ貴賤こゝ[illegible]こゝ礼こゝ
法こゝ和こゝ節供郎月の表こゝ他諸
こゝ多用こゝれこゝこゝ一世の表談こゝ[illegible]
こゝ月の事こゝ[illegible]こゝ
他諸の用こゝ[illegible]こゝ
冬こゝ[illegible]こゝ名月おほく嘗時

の花おすすはきをうつしまきの花尾といひ
書句を鈴とむすびまひらうまきの実をきく
内い意るのんれおれぬ有まとあれ或を和意るを
まちとしてやを紙よの嗅おとゆ尾て来ゆ意るを
会をあるを或をゆ尾るとしいひ或を嗅字
特としいそり意の塘竜を掌立の仕入まを毛を
かゆるを意を事りはてを意をて
六月を初をかゆれいをを尾はをいめををを事を
意るを意ををとてふるすをれい事意るとを
時い法してを意の事をとしてを一秋を塘ひとをい

秋意るとつひい意るをの皆秋ありはるを一説
をい塘ひとを意をとそりをれをい秋はるを
皆也おれをを吟味の不貴をやはを意或を
筆意るをとを名ありて要を実の筆をおを
て秋の和ひをとをるを一あやをを名をれ
ゆを一和を意をはをををくをを意をを
ををれの皆をを意るの抜を名ををゆ本
を意ひを意特をを意をはをを抜を
を秋俳諧をを評をを意るをを士農の風俗
ををを意を腹の遊真ををうりをい例の雅俗

二用ありて他諸ともくらべ合用あれば一ツ物の寒
ほとんどかくのごとく一世の異議を霧りておほく
たゞ多くは用ひ来れども全く新制
なり○今梅もまた古法より格ちがひ歟とも
いい難し○今梅もまた新制
なる時へ及ぶとも北合用して今式とそれも通
せられそもいれを二ツ○多くは宮廷つくれい常例
と新とをし古例ならびて一句を分れてある時を
同年とも二句をゆるすべきやまた句法をくはへ又句
ならびて三句法をうるべきや也○狂歌もまた

者法の中より面白とうひ掛詞とうひ川物しゆ遊
和歌連歌此古法より節供の例とかりて一句をもれてある
あれいけにを節供の例とかりて一句をもれてある
時を波ふ新しとあるを一ツもむ今ツ句を分倫
ちんちゝ八多ふし意れ二ツ八俳諧に多用られ
久を此古法いにるるまして去嫌いを句をるべきを
ならく一法の用を結をへけ式八初句く新制に似れ
と全く古法の例あるまもあるをもるべ一種の
異評より一世の異議と霧ひて用ると用さる
と例ようへの横意くまるべ

○ 季とあるは新とある物は事

むかしより連歌の式は序は花の名とあるは
おもて一名とおもて一季とはいとあり同季はいとあり
又句去あるはかりなれとはとはは合はいき句
の害しある時も物は物はしはは今は俳諧の書秋は
例の句去はいとあるみをいきて二句を一きはやま
て名月の題を論はるに發句はとれは季と
ありて季句はとれは新とあるはあり物はは名は
のは中に○はは集の第は論ありては第は季

は表あるは書は表はの動は文はて弱の第は
なるはれはれは俗の第は全て変はれは嫌の
俳第は新はりはもはるは花はるのはは
はもはは第はとはれは花はは行はは第
はるは新は季は用は句はは花の設
はれはは全はは文はれは俗はは弱は
はは花はは新は季の鶯の鶯のは
れは物はは新はは句はは例の編
はは雪の第は俗の第は新
はれは季句はは花は俗は第

と新とするこゝ俗とゝなぬ角一○又と朝日此
以幡より拾翠抄扇面に扇流れたるもとゝ河と
おくて古抄よんゝるとゝるれとゝれの流源と称とれ
いこゝ詞もゝなこゝん古おゝ河と新こゝもゝてれとゝ
ゝゝ後白もゝ事白ゝもゝこゝ能濃の事話ゝれい
ゝれゝゝと両用の事一とゝいゝむ川物ゝて二事ゝ流り
て北遊の對ゝれいゝ事ゝも新ゝも用ゝゝゝ也○秋と
灯籠とゝゝまれゝあり抄ゝおゝ流ゝて盃の原式ゝれと
灯籠といい物ゝて事ゝも新ゝも用一一燈油
ゝ盛放生ゝゝ秋ゝ作ゝゝゝゝて多と放ゝゝ

例の二用ゝんゝゝる北遊とゝゝ詞いゝゝ川物
の名ゝゝゝゝゝ事白の新ゝ白論ゝて事秋の二事
ゝ用ゝるゝゝ例の変謀ゝゝる一ゝゝ也○みゝ孫呂
用幡象ゝ抱ゝゝゝて古おゝおゝとも
ゝる貧富の両用ゝゝ時ゝ屋ゝおゝもかゝる
事槽ゝゝゝゝ山ゝ此用ゝ新ゝゝ也
燒ゝゝ事ゝて作の式ゝゝ会拝ゝゝ白論ゝ
ゝ一ゝれゝ夜ゝ蒲団踏皮沈中のれゝ作て二用
ゝゝ事ゝ也古抄ゝ孫ゝみゝゝゝゝゝれゝ綿帽子
ゝゝ新ゝゝゝゝ用ゝゝゝて事ゝ一一変ゝ

勝れ胴切も氣血の不足よりなるものあれいと家伝すも
某閑なるも物と粧俗のおのづからそれ新しきに用ゆる時
もあん例の用手をとるべし一うるたれと詩哭
の雅宴とてあるや○今梅雨なるに時武のいうれる表秋
い例の三句はさて事節の用ゆるにいたり
あんなるべしたれ自ら一句なるにそなへ元年人の
扇一ちとして老人と扇用を弱ありくしいうむ
と古和の姿情の用と今ゆるにて名月と称る
なる事にて事は宮ちる時おのづから句
とを用とをいうもあるもあるもある

[illegible]也さてこの句と事をとるもかるもの
古法の五句去るあり三句ゆる句を用ゆる
一ちとそれ新ありとおもも用事と
やうなる今は偏るなるん西さくもけ一ぢい
かりて古風の俗ゆるとゆる秋家の賞翫
むるを他ゆるむりて家謡と一うるを百世の明盟
をまり屋をそなる也

○名所と新の發句は事

[illegible]和哥は撰集にも新ゆるあれい新旧

とうもありて連歌もこれを名とせん〳〵うたの俳諧
ゝにてとゝのとゝ新の発句なをなくの用ゆて
四季の部立ゝ世節とて二〇今按ずるに
名所ゝ新の発句ゝ二句ゝ前の名をもて
その風景の情をとゝつしたるゝ書手まと後に
ゝゝゝ姿情いかゝゝゝゝゝゝゝ一ゝを
重時の時代ゝ

あさゝゝと浦ゝ波ゝ片ん
かくゝゝ拾ゝれゝかの浦ゝの姿情をとゝ
ゝのおれゝもゝゝ作ゝうみのゝち武陵より

伊賀ゝゝゝゝゝ集の前輪ゝちかゝて
かちゝゝゝい拾つゝき坂と長生哉
けけけゝゝゝれの人丸前のゝゝ反牛もある和
とゝゝゝあ歌服もありてむゝゝゝの連歌
ゝいゝゝゝ北蔵ゝ作ゝゝゝ名所の新いかく
ゝゝゝゝゝゝれおゝゝ比の陳作ゝ次て
あゝにゝゝゝゝ作ゝて
かくゝ作ゝ角物ゝけよ次て
けゝゝゝ花ゝゝゝゝ臺解の西国をおのゝゝも
源氏ゝ遠ゝゝゝゝ拾ゝゝ俳諧の同のこと

を限てかくのもれい紀年を書きあらはすまて
次にあつて北用まあるとそれ〳〵と新鮮なる
いつむ名所にはおもはせ作りおかれてあり
あるとも及つとみあるとて老懐の詩亀と
年くや猿ときもてる猿の面
けの句をよみすて迎年のことを筆にまかせ
歳旦の詞おくれいそとして新鮮なやいつむ或は
世事格をやいつむ或はいつれも新といひ新鮮とも
いひ事を格とい今の新製にてこれと今
の俳諧の名目をとてつかまつる

蓮二云けいのおもむきの白馬の類説に祖あり
て先師の遺稿にも荷在をりてもに作の大和
り御て記りかるとり軍書とうの芳野山と子
句をとる時の紀れりと雅陳ありと陳の詞を
故義を富士芳野の名を對して秋を一時の
作おとりて貞室を人此をそくと芳野を
ぬくとる名句ゆへ此をひとり此
ちるとをとる家の門人をとる命てより此の著自
を作んを路と作とまる此を家をんとて先師
いけ新とおもはれ〳〵諸に祖義の詞と徳と

富士を雪をおろしたる〳〵苔四つまでおもをおもはるゝ
〳〵むかしの今にはじめの句の雲をおもはいたま
一般の脱力をおもふべて作者の意をおもふ
〳〵それい授者のおもふ〳〵きもはけはしもを命
新句も新歌も先作の遺稿をあきらかあるを
中に橘之屋文弾のちゑ北条鎌倉「安」に
くき名のうゑやく意の山はこの句をかの金堂
まて百部の撰集をはじめて新を部とそれ
しらお章を天の橘之の名をあをを弾のを覚
をそあり也後章をそをのをを名北ひくきより

蜻中と謎語とをとる也但ふ悪の山と蜻中
のをを山といひもおの句歌とをりをおもおの
くを集をを憑を部ありて浦まの半ち
もおを〳〵棉車の句と意と部と意の三句見
はこの句をを部ありておいち女憑とありて
はを師の句あり後い傾城憑とありて秋を坊
作ありを集の部をを集をあを一句
これを孤語要北仏ある一おの〳〵新を部
のあをひを橘をを雲雅とありてをそをを
はの句を物を居のを詠あるをを和をを雅と

よせるのゝ雪をうゑ作の形容あんとも此
又例の衆議あつて新辨の一格とあるとも
ちるに寛永の初比あん湖南の新景山
寄あつて七浦や二つのそもと一つまつとよ
奢句あつて時の比ほとゝぎす我門の俳式
各所に新の俳あれとこれを新とも
かゝくはつて新辨もはつてはつとも時
又寛永比脈とはつてはつ格とも又一つ
はれとなる義の減後ようてはつ新製
あれは駿と云るはあんなを一発此

衆俳より今日の撰おとはさんとて算の脈
をはつはつはつ新もやあるはつもや▲之技
まるに先師の没はつ新をまつも宣かく
おれの議論も和月乃中に名あり長良の
將門宮にて四季の將聞とよ集とえねと
餘奥八新の將聞とよ紙とはれ
ようとまつ此の將の子孫蓬二もかくとも
はれと用ひはいはれ新の將聞に新辨
俳句のことをとよ時とはかくとはるとて新
とあるとかはつはつとはつて四季の餘奥あ

い新のかゝる名あるゝんをあるとれい者旬
と服と起立の二格とけ用あんゝて錦を掛
を張てにとゝ作られい剣子いをつゝ二旬
の間と巻りてゝおとを性と新おの新あんと一新
の裏詠を作るまりぬかくゝあい七浦の言も
け服の錦の掛も者白を時の風と交りてゝも
かくもをゝれと服と書用の作をきあんを
授をるも服のはたあんゝ作をれゝを武と
あゝ角てをの命ゝと筆てをゝあれ竜
今北六郎と作と彼てゝよ雅語北郎もかゝひて

おゝれゝの名用をもおゝ用をも一をゝやおゝるし
を和歌北論あれいや

○四季の名類北事

中古より四季の名言をお用むれ嚢竹と北て
を書け物と用於をれとも御用くを京くの書用
ゝて通用あゝ物物おゝ用をれい禁中の行事
より四季の名をを論て神社御園の行法し
等本を歌の名類も北をを嚢竹とよる言ゝや
をゝれとも嚢竹を例と雅語の用ゝるより連歌

の附合を盛とし[illegible]の用となる
物名もあまたあれいま此俳諧に用ゐる物を
時代の用捨[illegible]をしけれ式を
古今に論ある物とあげて今稼の品ことを加へ
し也移りくらを我門に[illegible]達の人あり[illegible]
名れとも例とし[illegible]四月より十二月此時月
まて彼[illegible]噇竹と用ひて事細の式目も
あるべきやとせしけ式の制をまる[illegible]或は書る
とも秋冬とも二季の間にまぎらるる物い多き
と雖しかきと加へて[illegible]れと今式の加減と

[illegible]或は鉢裏と沈陀とい[illegible]裳と服部とい[illegible]
[illegible]れと今式の倒[illegible]い或は新蕎麦
秋とも[illegible]花に時[illegible]ると[illegible]ハ[illegible]れと今式
の貴賤とい或は古おの[illegible]用とおて今式の
有用とする[illegible]れと今式の當用とし[illegible]
新故の[illegible]ひすて例の古式とめ[illegible]
[illegible]と温故知新とやう[illegible]
遠[illegible]の[illegible]より兼載宗祇の[illegible]
[illegible]て紹巴の又百ケ條[illegible]
[illegible]

又千金一斬の所又あひて一部一部通のるとき云へい
何の為へきはらあんん何の向へき求らのん爰と
一部のん例ととそ云る一きせニこまこてるの跡と
そあるて他諸い例の事話ちらりとそ在よそ付
の衆詠と霞ひそ世ようそ人の衆議ようきせて
そ日くに用と達ま(きせ

○春之部

公節饗　世名ハ佳節ノ饗礼すりけるよ正月ノ初饗
ヨリ節事氏節人氏饗子ノ習ハ俗習

十り或ハ二公節ト云フ詞ハ袴肩衣ノ威儀ヲ止テ
隙時ノ遊ヲ云(リトリ或ハ朝狩ト云フ詞ヲ之跡ノ
人ハ節ノ詞ト成ル世等ノ俗習ラモ知(きすり本
ヨリ俳諧ノ世法ナル諸国ノ俗談ヲ知尽ス(シ

淡雪　世名ハ古今ノ論アリテ大昔ハ春ト云ク中昔ハ
冬ト云(リ○今按スルニ淡雪ハ冬ニ用(キ所以
ナシ雪ノ班ナル形容ハ初雪氏云イ薄雪氏云ハン
春ノ雪ノ平白ナランモ日影ニ散リテ淡薄ナランモ
実ニ氣ノ淡和ナル故ナレハ淡雪ハ決シテ春ト定(シ
世等ハ例ノ加減氏例ノ當用氏云(きすり

雪解 此詞ハ古式ヨリ解ルモ消ルモ春ト成セレト雪ノ
消テ氏消カヽルモ朝夕ノ日ニ結ヒ洗足ノ場モモ
結タラシニ頃ニ春ト定メハ冬ニ用ヰ詞ナクテ附合
ノ言ト成ル時アラン爰ニハ解ルヲ春ト成シ消ルヲ
冬ト成ス時ハ消ルハ物ニ敵シテ消ヘ解ルハ我ト解
ル故ニ冬ニ春ノ道理ハ明カニ詞ニ用ノ自在ヲ
得テ此等ヲ當用ノ働トヤ云ハン去レト冬ノ部
ニハ断ルニ及ハス

陽炎 此名ハ古式ヨリ新トアリテ諸抄ニ色々ノ説アレト
燃ルト詞ヲ添ヘスヒ決シテ春ト定ヘキヤリ鮒蝣

稲妻ノ説ハ連亭ノ用ニシテ精蚊ノ説ハ質子ノ
所ヒニヤ○今按スルニ物ノ散回ハ殿羽習ノ二子ヲ用
テ同訓別用ト成スヘキヤリ殿羽ハ木葉ノ殿ヲ伝
習ハフヒヘノ畧語ナリ或ハ耻習ト云フ類ナリ然レ
ハ散回モ群尽モ散乱ノ助語ニシテ和漢ノ通用
ト此等ノ孚ナリ或ハ荘子ノ野馬遊糸ヲシテ
遊糸モ陽炎モ同意ノ説アレト漢語ノ遊糸ハ倭
語ノ用ニ非ス增テ野馬ヲ以テ野馬ノ説ハ何ノ俗習
ニヤ論スルニ足ラス或ハ糸遊ト云ハ湯桶訓ニテ和訓
モ例ノ貫束ナク糸遊ト連歌ノ詞ニテ何レモ

俳諧ノ用ニ非ス云トいふゆゑ假名ニ書テハ指合ノ替ニモ用ヒキヤかをろふニテハ海ヘキ事也

海苔　此名ハ故実ナリ櫻海苔耳海苔海髮多薩海松ハ但夏ナリトソ然ルニ雪海苔ト云物アリテ例ノ加減ヨリ冬ト成セル其故ハ冬ノ部ニ見ルベシ

海雲（モヅク）和布（ワカメ）青海苔（アヲノリ）此類ハ總テ春ニシテ名ノリ

草類　此名ハ俗習ナリ蕺（ミヤウガ）蒜（ニンニク）或ハ茗荷（ヒトモレ）葱（ヒトモレ）或ハ角芹（アサツキ）芹（カリキ）芹根（ネ）ハ但冬ニシテ子ギトハ東詞ナリ

鶯合　古抄ニ新ノ説アリト古抄ハ渡鳥ニ入タレト琴弾ヒ決シテ春ニ定ヘキナリ　鶯囀ノ詞ヲ添スシテ春ナリ

結花ニ郭公　古式ニ郭公ノ事ハ花ニ結テモ當ニ結テモ甘ヌナリト云リ○今按スルニ後京ノ詩ニハ杜鵑ヒ写鶯ヒ云テ何モ暮春ノ景物ナレハ幸ニ其例ヲ假リテ暮春ノ用ト成スヘキヤ本ニ當ノ字ニ結ハハ決シテ春ト定ヘシ此式ハ例ノ加減ナリ

木地焙縁　此式ハ新撰ナリ然レハ同焙ヲ夏ト成シ焙周ヲ冬ト成シ今ノ焙縁ヲ春ト成セレハ朝茶湯ハ朝貞ノ例ヲ假テ秋ノ用ト成スヘキヤ茶人ノ家ニ尋ヘシ

○夏之部

若葉　古式ニ木ノ若葉ハ甘ヌト成シ草ノ若葉ハ春ト成シ青葉ハ總テ新ト成セルカナリ然ルヲ或抄ニハ花ト若葉ノ二取ニ若葉ニ花ヲ結テハ春ニ云イ甘ヌニ云ヘル何故ニ二決ナラヌヤ○今按スルニ月花ハ風雅ニ一座ノ飾ナレハ蹉タル物ハ加減シテ四季ヲ自由ニ配ケレハ若葉ニ花ヲ結テハ決シテ甘ヌト定ムレ○猶按スルニ此配ハ花ハ春ナリ葉ハ甘ヌナリ実ハ本ニリ秋ナルヲ其葉ニ若ノ一字ヲ結テ若葉ヲ甘ヌト成セルニリ若草ノ春ナル道理ヲモ知シ然レハ花ハ春甘ヌニ蹉テ花ニ郭公ヲ結タルトハ入遠タル働ニテ此等ヲ加減ノ機変トハ云ヘキナリ

残花　此詞ニハ古今ノ論アリ然レトモ残ノ字ハ其季ヨリ此季ニ残ル子ハ残ト云ヘル道理ナレ花ハ本ヨリ春ニ決シテ残ハ甘ヌト定ムレ惣シテ残菓残菓ノ類モ古式ハ一様ナラヌ故ニ十只ハ十色ニ貫菓子百世ニ論ノ断ル時ナレ残言ハ残菓ハ重陽ニ残ル残菓ハ何ニ残ルヘキヤ残字ハ總テ其季ノ次ニ取リテ此論ヲ残ノ字ノ例トスレ秋冬ノ部ニハ挙ル二乃ス

牡丹杜若　此二名ハ和漢ノ遠アリテ詩ニハ牡丹ヲ春ト成シ歌ニハ杜若ヲ夏ト成セレト中古ニ誹諧ノ加減

ヨリ二名ヲ夏ニ用ヰルニ初夏ニハ花ノサナキ故トフ

松竹落葉　古抄ニ松竹ノ落葉ハ雜ナリ常盤木ノ落葉ハ夏ナリト云ヘレト松竹ハ何ニ常盤ナラヌヤ山館ノ風情ニハ殊ニ面白キ物ナリニ昆ハ決シテ夏ト定ムヘシ去ト落ルトハ詩ノ詞ニテ敢ルトハ大和ノ風雅ナリ譬ヘハ桐葉ノ一重ヲ落テ彼ハ敢ル次ニ非ス夏ニ次ル情ノ論ヲ知ラハ千式万法モ夏ニ明ナルヘシ

水芙蓉　此名ハ新撰ナリ芙蓉ハ和漢共ニ秋ニ部ニ入タレト水芙蓉ト云フ時ハ漢ニハ蓮ノ一名トヲ然レハ俤ニハ和ケテ水芙蓉ト續スヘキ芙蓉ニ水

ヲ結ヒ乱ルヽト云フ詞ヲ添テハ決シテ夏ニ用ヰキナリ秋ノ芙蓉ハ陸ニ咲テ凋テ散フ又物ナレハナリ此類ヲ向作ノ凡例ト成スヘキナリ

老萱　此式ハ全ク新撰ナリ然レヒ老萱ト本ヨリ漢家ノ詩ニ出テ或ハ狂萱ヒ乱萱ヒ總テ暮春ノ物ナレト例ニ今式ノ加減ニリ殘萱ハ勿論ニテ老萱モ夏ノ名ト成ナハ萱ニ老ノ感情アリテ只雅ハ例ノ林(サヽレ)數味(ミヽ)ト云ハシ此名ハ衆議ニ據ルヘキナリ

萱ノ附子　此式ハ例ノ當用ナリ○今按ルニ萱ノ子ハ春菓ニテ夏飼一ハ六月ノ間ニモヲ賢テ冬

至ノ比ニ鳴習フ故ニ笛子ニ鳴子ヲ結テ冬季
ト成セルナリ然レハ夏ハ閑習ニテ或ハ引鳥ノ
親ニ附ケ或ハ笛ヲ以テ引音ヲ教ヘ稽古ハ夏
ノ間ナレハ附子ハ決シテ甘ヌトヽイ笛ヲ結テモ甘ヌト
知レ月星日ハ(ツキホシヒイ)ウト引声ヲ最上ノ笛トセリ

鳥巣　傘ニハ鶉ト都鳥トヲ加テ水鳥ハ總テ冬ナレト
他ニ鳥ハ歌道ノ秘事ナレハ実ニ記サスト書捨テ
例ノ子細モナク新ナリト云リ○今按スルニ都鳥ハ
指テ俳諧ノ用ニ非ス増テ秘事ナレハ論ニ及ハス鶉
ト云イ鷺ト云ルハ本ヨリ水鳥ノ用アレハ巣ヲ結テハ

夏ト決スレ然ルニ鳴ノ浮巣ト云ハ古式ニ新ト成セル
夏ハ水中ノ芦ニ巣ヲ搦メハ水ノ増減浮沉テ四季
モ其侭ニ捨置ク故ニ道理ヲ附テ新ト成セト鳥ノ
古巣ハ總テ去物ニテ其巣ヲ掛ル時ハ夏ナレハ
浮巣ハ決シテ夏ト定ヘキヤ巣ニ用ナキハ句作ニ
依ルベシ鳥ノ別名ハ久々ク部ニ論アリ

翡翠　他鳥ハ詩ニ名アリテ古物ハ渡鳥ニ入タレト夏ノ谷
川ニ木陰ヲ傳テ決シテ夏姿ト云ハ川蟬ト倭名ナリ

沖鱠　他名ハ俗習ナリ或ハ海産ノ別荘ト或ハ船遊
ノ時ニ魚ノ新敷ヲ称スレハ決シテ極暑ノ名用

ニテ此等ヲ例ノ貴賤ト云ヘキナリ

冬 此ニ只ハ京家ノ式同ニ多ハ秋ノ季ト成セルハ
書 案スルニ冬ノ字ノ惑ニヤ夏ハ涼ヲ好ミ秋ハ冷
ヲ悪ム天地自然ノ道理ニシテ此等ハ夏ト決スレ
物ニテ古今ノ遠ト八天理ノ次第情ヲ論スレテ文字
言語ノ名ヲ認ル故ナリ是ヲ千式ノ例ト知ヘキ
ナリ

○秋之部

花畠 佛家ニ正花ナリ春ナリ細ニ穿鑿スレハ種々
ノ理屈アレト此分ニテ置カ能ナリト云ヘリ如何ナル

秘説ニヤ知ラス○今按スルニ花壇モ花畠モ決シテ
秋ニ定ヘキナリ花園ト云ハ中花ニ似タル庭園トハ
仰向キ畠ト八俯向ク多ヲ佛諾ノ次第ト云テ種々
ノ理屈ハ今ノ用ニ非ス此等ヲ今式ノ有用ト知レ

桂ノ花 此名ハ今ノ書用ナリ古式ニ春季ノ説モアレト
地下ノ桂ニハ花ノ用ナリ和歌モ月光ヲ讀タル
例シテ月ノ異名ト成シ秋季ト定ルハ勿論ニテ
四季ノ詞ヲ結フ時ハ四季ノ月ニ用ヒナリ然レハ
有明 既望ノ名ニ例シテ日モ星モ二句去ヘキナリ
ニモ二句去ヘキナリ

植物

鳥鵲橋 古抄ニ生類ニ非スト
加何鳥ニ云ヒ句去（キリ） 鳩吹 世詞ハ種々ノ説アレト
手ヲ吹テ鳩ノ真似（ナリ）

紅葉散 世詞ハ古式ヨリ且散（カツチン）ヲ秋トスイ散トハカリヲ
冬ト云ヒト花ト紅葉ハ春秋ノ艶色ニテ
花ノ散ルモ春ナレハ紅葉ノ散ルモ秋ノ若サリ增テ
冬散ハ木葉ト云イテ枯テ色ナキヲ用トセリ世業
ヲ古今ノ用捨ニシテ例ノ且字ニハ又向数サリ

柏散 世柏ハ伽傘ニ説アリテ論語ノ松柏ヲ證文トシ
事ニ見ハ新ト成セレ共ニ散字ヲ結テハ決メ
秋ト定（キサリ）○今按スルニ論語ノ松柏ハ松（マツ）ト柏（カヤ）ト

常盤木ニヤ然ルヲ六書正誤ニハ柏字ハ柏字ノ俗書
ナリトヤ云ルヲ大和ノ俗習ニハ柏ヲカヤト訓シ柏ヲカシハ
ト訓シテ世類ノ正俗ハ数多ナレト知テ誤ニ従フ
国風ノ故実トハ云リ去サラ肅新ノ註ニハ椿有ニ義
實ニ而如柏トアレハ倭ニモ婚テハ椿字ヲモ用ユ椿ト
柏ト異字同訓ト云ヘシ或ハ伽傘ノ設ニハ紅葉セ又
故ニトスレト桐葉ハ紅葉セ子氏和漢通用ノ秋葉
ナリ惣シテ我家ノ真名遣ハ新字俗字ノ二論
ヨリ古今ノ両用モ正誤ノ二様モ伽諾ハ例ノ俗習ニ
従テ今日ノ用ヲ達スヘキサリ

椎柳栢　俗傘ノ椎下ニ紅葉セヌ木ナレモ椎トハヤリモ秋
ヤリ或ハ葉モ枯モ秋ナリト云テ秋ニ用ル子細
ヲ釈セス然レハ栢トハ入遠テ彼ヲ新トシ是ヲ秋トセ
百廿ノ惑トハ世謂ナリ○今按スルニ椎モ柳モ栢栗ノ
名類ハ全ク紅葉ノ所ニ非ス落ルトカ拾フトカ
実ヲ結テ秋ナルヲ蓮実ヲモ甘子ナリト云ヘレハ古抄ハ
如何トモ其故ヲ辨ヘス

新蕎麦　世式ハ例句賞翫ナリ奈何トナレハ冬ニシテ
テ食フハ秋ナル前後ノ働ヲ賞テナリ云レハ
茶ヲ搗ムハ春ニシテ新茶ハ頃次ニ甘ト成セル遠速

ノ用ヲ知ル時ハ れすノ宜給フ不時ノ誠モ其時其物
ノ程ヲ知テ分外ノ珍奇ヲ好サレトノ

初鴨　世名ハ全ク新撰ナリ或ハ賞翫ニ加減トモ云ハン
○今按スルニ奉膳式ニモ一ノ鴨ト並ナカラ賞スル
所ハ秋冬ノ差別アリ云ヒ見句ノ姿情ヲ論ヒハ初ノ
ト云ハ風雅ヲ思ヒ初鴨ト云ハ風味ヲ思フ多ク天眼ニ
天耳ニ云リ辭言ハ初ノト音ニ喩ヒ風味ヲ出ニ思フ
鴨ノ冬ナルハ勿論ニテ初字ヲ添テ秋ト成スケン

野宮別　世式ハ禁中ノ行事ニテ古式ニ世類ハ数多ナリト多ハ
連歌ノ用ニシテ俳諧ノ手詰ニ亜用ナリ然ニ俳諧

八下学上達ノ道ナレハ宮ニハ此等ノ一名ヲ挙テ名ヲ永
殿上ノ礼例ト成ナハ四季ニ此類ノ名ヲ透(スクリ)来テ作詠ノ
曲節ニ用ヒトナリ去レハ野宮ハ逢瀬ト賀茂トニ在リテ
伊勢ノ齋宮ニ移リ玉フヲ野宮ノ別ト云リトヲ云ハ
羈旅ニモ哀傷ニモ非ス增テ恋無常ニモ非テ哀
ナル所ヲモ多ケレハナリ

○冬之部

枯尾花　此名ハ古今ニ論アリテ秋ニ云ヘシト枯字ヲ
結テハ冬ト定レシ其故ハ名之木ノ枯ルヲ冬ト成シ
名之木ノ散ルヲ秋ト成セル散ルハ色アリテ枯ルハ色ナキ
故ナリ然レハ名之草モ其例ニシテ枯尾花ハ決シテ冬ナリ

殘菊　此式ハ諸抄ニ論アリテ伊勢ハ重陽ニ殘リテ秋
ナリトスレト桃モ菖モ其類ニ非ス然ルヲ和歌
ノ公式ニ十月五日ヲ以テ殘菊宴トスレハ富安字
ニ及ハスシテ決シテ冬ト定レシ此等ヲ加減ノ用ト云
ハン殘字ハ總テ殘花ノ例ニ效ヘシ

行歸　此式ハ全ク當用ナリ古抄ニ秋ニシテ渡ル部
ニ入タレト山雀日雀ノ類ニハ非ラテ行歸ノ心
物ニ連ニスル民家ノ軒ニ掛テ鼠防ヲ傳ヒ水棚ニ

遊ビ声ノ清ミ久シハ殊更ニ寒ケレ増テ春帰ル次ヤ
モ見ヨハ決シテ冬ト定ムレ世ノ常ノ姿情ノ例ト云ハン

木兎　世木兎モ例ノ新撰ナリ古物ハ秋ノ部ニ入タレト渡鳥
ニモ非ス色鳥ニモ非ス増テ鳴声ノ物凄ハ寒ケサヲ厭ト
ル故ニトヤ然ラハ二季ノ加減ト云イ夜鳴ク鳥ノ書用ト
云イ決シテ冬ト定ムレ或ハ鳥モ部類ナカラ新ト成セル
ニ用アリテ世等ハ古物ノ文覚ト称スレ

鵜　世鳥ハ俊名ノ火焼ナリ然ルヲ古物ニハ渡鳥ノ部ニ入タ
ト其名モ其書ノモ朝霜ノ氣色ト云イ秋ニ小鳥
ノ多ケレハ冬ニテ部ニ跨テ世名モ加減ト云キナリ

鳰　世鳥モ論セハ新撰ナリ御傘ニ鶏下ニ鳰ト都鳥トヲ
加ヘテ新式ニ新ト云ル歌道ノ秘支ナリト書給テ例ニ
其故ヲ暁サヲハ今日ノ用ニ立難シ○今按スルニ鳰ニ鴨
モ水ニ住冬ノ差別モ無レハ某ヲ結スハ新トモ云ケ
レト鳰ハ鳴声モ寒気ニテ俗語ニ掻井ヒモ云フナレ
ハ能諸ニハ名目ノ自在ヲ称シテ冬ニ用アラハ冬ニ
用ヒキヤ然ラハ鷺鴨ノ部類ニ勝リテ例ノ新ト成リ
チ子ト成リテ附合ノ骨用ト云キナリ

鶯子　世名ハ古物ニリ啼子ヲ結テ冬ト成セレトモ
鶯子トハ名目モ長ケレハ啼字ナクモ冬ト定

（シ彼ハ冬至ノ比ヨリ鳴習フ故ニ其子ニ冬ノ用アレ
ハナリ増テ草ノ笛鳴ト云ハ子ノ字モ及間敷ナリ
尾越鴨　此名ハ俗習ナリ鴨ハ往来ノ道ヲ定テ山ノ尾嶋
ヲ越ル故ニトフ然レハ初鴨ヲ秋ト成シ鴨ト名リ
ヲ冬ト成セル名ハ殊ニ能諧ノ用ト云ヘシ
綿入棉打　古物ニ綿ノ真ハ分明ナラス或ハ真綿モ木棉モ
総テ冬ナリト云ヘレト去レハ附合ノ害アラン綿
ハ本ヨリ新ニシテ綿入ハ綿技ノ對ナレハ入字ヲ添テハ
冬ト定ヘシ或ハ棉打ヲ秋ト云ヘレト綿ヲハ摘ト云イ
棉ヲハ打ト云フ打ハ木棉ニシテ決シテ冬ト定ヘシ

棉取新棉ノ外ハ秋ニ非ス或ハ綿帽子ハ衣類ニ
非ストニ云イ綿ニ海嵐腸ヲ雑フノ類ハ古今ノ透
ナレハ論ニカヌハス然レヲ綿ト木棉トハ附テモ苦
カラストニ云テ蚕綿ト木棉トノ釈文アレト綿ト棉
トハ莫堅切ニテ音訓ニ替ラヌヲ何故ニ附句ヲ
嫌ヌヤ古物ニハ此類アリテ皆々論スルニ暇アラス
爰ニ此綿ノ名ヲ挙テ方法ノ凡例ト成サハ其外ハ
推シテ知ヘキ事ナリ
廿路塔　此名ハ古来ヨリ論アリテ歌冬ハ山廿路ニ
応ルタレト和歌ノ題ニハ山吹ニ用来タレハ穏

テ大和ノ故実ト成シリ然レハ中古ノ式目ニハ蕗塔モ蕗花モ同ク春ニ用タレト此名ハ例ノ賞翫ヨリ村消ノ雪ニ結トモ蕗塔ハ冬ト定ヘシ然ハトモ蕗花ハ溪ニ賈鴨カ春雪ノ詩ヨリ春ト云ハシモ宜ナレト其名ハ指テ佃諸ノ用ナシ蕗ヒヲハ但春ニシテ一物二用ノ例ト云ヘキナリ

冬瓜　此名ハ佃諸ノ自在ニシテ冬瓜ト書ニ唤ヒ或ハカモフリト訓ニ唤テ中古ハ總テ秋瓜ト成セリ去レト幸ニ冬ノ一字ヨリ霜ヲ待テ賞スル物ナレハ西瓜ヲ秋トセル加減ヨリ冬瓜ヲ冬ト定ヘキナリ

雪海苔　此名ハ俗習ニシテ或ハ加減ト云ヘキトヽ此物ハ北越ノ名産ニシテ海邊ノ岩間ニ降積タル雪ヲ波ノ打浸ス柏子ニテ凝テ海苔ト成リトヽ然ルニ雪ヲ黑ト訓セシハ白ヲ青ト云ル義訓ナラン○今按スルニ海苔ノ名ハ春夏ト渡タレハ雪海苔ヲ以テ冬ト成サハ例ノ疑議ニ及ハスシテ此等ヲ加減ノ當用ト云ヘシ

大根引　此詞ハ冬瓜當用ナリ大根ト略シテ音語ニ讀ヘシ京家ノ大根引ニ效フ（カラス牛房モ同シ名類ナカラ引ト云ハスシテ堀ト云フ其ハ名

ハ秋ト知ベキナリ○今按スルニ作諧ノ式ハ新式ニ據ラス古術ヲ遵ハス今ノ日ノ世法ニ遠ケハ其座ニ臨ミ其時ニ從ヒ其故ヲ諭シ其序ヲ明メテ自己ノ理屈ヲ究ルサラシハ其ヒ所ヲ一世ノ衆議ト知リ其所ヲ百世ノ明監ト知ベキナリ

車芝ヒ云ヒ式の沓用を始る節家の公式より終る大根引の俗習まてをのをの四十余條あり

又或ハ連乗の有用多く諧の用多く或ハ古今の遠用とをり或ハ季節の加減とそれ〳〵あり三十余ヒ式とをて千式

万法のれ例きんこれをもちゐて俗稽の微中を失ハすして一筆万通の機変より式の序詞ゝ云る子達の人をえらひて委しく四季の名れをあらハさしめ作諧の誤不誤を作諧の用ゆ用もきを毎て式と格別ゝて自己の名記をひろめんこれ百世の惑をこれ明らか

○作諧ゝ假名はゝひ此事

大和ゝ假名遣とゝ定家卿の拾遺抄ゝ作ゝ定家卿の拾遺抄ゝ紹巴の

字ゝ有るゝ天文の比北枝ありとぞ聞るゝ
世くゝいひ傳へて或ゝは実ゝ拍あるゝ事ゝ
と云ゝ也ゝ事ゝ撥字ゝ也ゝ色ゝ々の假名
あるゝ也ゝ庵字ゝ也ゝ親字ゝ也ゝ音ゝ也ゝれゝ訓ゝ
ゝの字ゝ也ゝ云ゝ何ゝ拍ゝ撥ゝ撥ゝ也ゝ
ゝ也ゝ字ゝ書ゝ云ゝ也ゝ也ゝ也ゝ
歌書の拍数奇ゝ也ゝ例ゝ也ゝ
ゝ也ゝ或ゝ也ゝ拍ゝ也ゝ
ゝ也ゝ也ゝ法ゝ也ゝ
ゝ通音ゝ也ゝ入音ゝ也ゝ

ゝ也ゝ也ゝ也ゝ也ゝ物ゝ名
ゝ也ゝ也ゝ調ゝ也ゝ
ゝ也ゝ假名ゝ剛柔ゝ也ゝ
ゝ假名遣ゝ字ゝ也ゝ
ゝ也ゝ假名ゝ也ゝ
ゝ也ゝ假名ゝ也ゝ
ゝ也ゝ假名ゝ也ゝ
ゝ假名ゝ也ゝ

真名と比配するをば書きにくしぶのくるあるを一きりとと
いあつかさむつかせことき假名ハやはりつかせ子孫
とはるを假名書の語文をつくるやうにして書法
の字形かくけやすれいあはぶさむと云一きさや
をつかうるをもて作りけかくしをつかい例の
ねあるを似たんれるを假名ハはきまりをつかう家
の口授をもて知一きさや或を文句をつくるやうにして
きを一つくるやうにとい能信てるを或を言語をゆよ能
てをもへゆよりてをつくるをもてつくるをもとをもぶ
の信縁をおるをもけれをもを字をのくるをもて

字形のくりをもを一定をるをば文句と言語と
に同訓異用の假名遣ありて上を用ひ中を用ひ
下をもるをもをおあるをもおれ假名遣のをるを
いひあひれをもはえへつちのれをもてをふを
新制のんるせをもて假名をひのゆをのをを
をもをのをれをもをれもをもてあるをのを学文
の歌力をんを已をもをねを耻をもてをんのをもね
を学をもれおを返をくを例の異議より
例の明笠をもをくを一きるをやをれをハ一をの法
をもてをるをのをもをるを一きゆをやを

○い ○ひ ○ゐ ○ゐふ ○ひ ○ふ ○を

いきく　鰯鯉類

いぷ一　𪂁雛類（アフヒ ヒナ）

盥　きらゐハ器の附也 或ハ手あらひとも　紅　くれなゐとも 又ちかしとも

住居　すみゐとも すまひとも　ゐる 不動字也

眠　ねむりと云 音書也 ねぶりと云 手話也　侍　さぶらひとも さむらひとも

くらゐ くらひと云 手話や

胤　たねとも たふりとも

旨　むね むまいとも むぺ　これを故実也

東花云古法よりひの故にこれは いきくと

ひふへの三用にて書く いふくきく

に通ひそぴをぶに通ふ故也されとも
音通を以ふへを唇の一音に通へといひき
くを喉牙の二音に通ひ或を略し定し
とする歯音の三に通ずる八きしチの横も
定まるもカキクケの竪も定まるも
これを大和の国曲（フリ）にて此字これ悔し
きの助韻おほしされは我朝の音律
此外をもとひ語もある指摩あれを
和訓よくもらて恥とする一△角變をも白
にいぴを如くのごとく鯛と笑ひ著名

とゝ
假名もゝ文句と言語とに動く
動ゝね詞あり物名もゝ
へ鯛鯉のまれ
まれおのゝ物名あれとも假名ゝ
次ゝ
きをあ
屋青の
あれとひ
詞ゝ歌
みのゝ

まれおのゝやとかん假名ゝ動くと
動ゝねけむ
文句ゝ動ゝ
めゝ
中の五品八古書の假名ゝ散在
八今ゝ
ゝひ
と動ゝね
上中下ゝ用
或ゝ

の半竟を和歌の撰集も武家の軍書
も假名〻真名とをくるより假名ハ
はくきを才とするを其書の用
あれいと婦人も優やさかんなるあり
きるを今ハ此和歌ありて万葉假名を
かなくさりひらくちなく真名をとりねね
る一字ゟ二字ゟ三字ゟこれいあとをの名を
をまゝ海ゟ同雅を此声の感作ハれ
い人ゟ言ハねゝ洞ゟこれをもちを
されと能書の家ゟ出れて所風傳ゟ

の風流ゟ多くハ用ゟ古ハ
詩ゟの好愛ゟ撰集ゟ入る〻くゟ
此形ゟ屏風ゟ入るゟ〻きねも詳ゟ式
の可嗤ゟ圏角の二紋ゟ軽重をゟ
むれいゟ文字ゟより世間ゟ多ゟ
せくゟこれかゟねゟ用ゟを多ゟ
まゟいあんゟれい再撰の要ゟ古い假名
いゟれゟ用ゟ一字ゟ百中の所詰ゟ

○ 不
○ を　遍ゟ　辨ゟ
直ゟ　蛇ゟ　やう　世れいね実や

東花云はこてよりて序詞あるて掛らるを
もとなてぽの假名あるよりはれてをねね
つもぽのうまおもしはるいそこぽるいきちい
のこときくやはれあるとのめこときぽ
をもはりてをねるはきねはけはるとして
作文とも但はこの五字をうの再撰也

○れ　男おとこ下はおとこ　猟　おかり　大お尾おを
○を　女をんな山下はやまと　小猟ぽけ　小ぽ緒ぽ
東花云はこうまと章法ありて眞の打てはにの
ぽとしてはるを音をと音をねと北急緩の

美ぽおいはるれと表法と詞のちはいありて
詞れいこをくあちこちをも四舎いをはみをん
て意しをぽを但通用也

○わ　わ已用上と下に用ゆ
○は　ぽ八同中と下に用ゆ　三輪　けれい文自也　みきと言
東花云は再撰ところに假名のんるそて
わ已と上下ともに用ひぽ八と中下ともに用ひぽ
はと言るおは再おれといはむらきこいはの
こはい上下ともに用ゆとわのまとてはもに用ひ
かてしをふみとみわのまれやぽ八めま

をゆとて用ゆるとてぷのよいゆとて用い
けるとてあぷれとあぷれのれもあとれ
とを清て書たるあしけかを拾ふを假名
をも或はまるはたるのれもまを用て
ぷのらを用ゆし或をんぷゆをとを
れもんをゆたをたをらを所をらし
を書はめくをりを假名のはくきをも
てふれいけかをけ例よをへしはれも
をはの假名はをひを庭ふは沃さぷ栗あぷ
鍬ぷめれをいるるねをも知をれ

をはてをめをよあんん例の家議をるる一せき
○ え　消きえル杖ゆ笛机ゆ山田社の絵のよし
○ へ　更かプル えゆふへの栄をく和あ　ね実せ
○ を　声コエ猶コエ えをも或を本ハ　すべしも　すをも
東花云えのををむより論ありて字の
をや分ねるを中えをも編えを花も
をもをゆ中えををゆるをゆるをありて
二音通をるねせ編えをえをゆの字所
をひ記えをを字北訓や或い所え
ををあれををはて質字よあんん

或ハ兄の子として法師の子の子
ありしと云説もあれと兄の子とえて訓
きしまゝとあるとれい彼と彼て石部と
つまゆかつしむとより伊呂波津江女
の彼しいふてあるとの人とゝ
○つ　とつるとも　つゝ通ふ　ゝ　せまゝ
○ち　とちるとも
法師　ホウシ　ハフシ　ホフシ　ホフシ　ホフシ　ホフシ　ホフシ
東茎云假名ひめて陸い共五條のおもき
ゝふ以下の五字ハ彼て紹巴

の字ハとまりて當用の假名と切補と
ゝおとり一とゝ再撰のあやまりもあんう
されや定家の假名遣とて後の人ハ
作りて彼の遠とあるとして云れ僧
仲理も名とかりて胸用と補ふとの
任せまゝ自見の証とまゝしい証迹
れ子の世雖しとも取てまゝ取ゝ
とまゝ一名とれとんゝ論ふいも
ゝゝ定家の假名ひも我とゝ
あゝ也て書付の任用と云ふ

蓮二云世に俳名をしるすあり古俳名
はしらひとつをもてはしりの新制なり
はしりを俳名真名ともにもちて大和詞を
助語とやつけて俳諧の文章は中世降
あるとりまり▲三接まるれば温鯛を物ゝ庵
の遺稿をなりて彼りて五秘の一巻もむし
え禅甲成の秘をや伊賀北西蕉庵をいつりて
後猿蓑の撰集の作にて長嘆いねめ又
稿とまくりてす第篇の跋撰あるにに
前猿蓑の真名文より幻住庵記をいつり

慈円捷の文論あり云略云我かりて俳諧
の文章を和歌連歌にはありて家を一格
あんすとをふを濃を四六の文はあり指よ
い体を清秘あるんまられ俳諧の手話あ
例の真名かちあるんをもといあ比翼北
形容を上を鮎鮠の羽の如く下を鱠鯽の腹
を似りをを和歌もあるを連をもあ
を海を神名の源氏狭衣の艶ある詞を
似を似をんをられとも今北文論を真名をを
返を返を和の真名あれいををひ世を有の洞

ありとて假名とまがひて真名と書ていとまつ
大和の文といつむ今論まる幻住庵の記も古詩
の詞をかりあつ傳文い走字よ百ねい云ハ
呉楚東南よりもとも世有の用とはをとく
云ハ呉楚はこそよりて事の手練い指と出をも
よはきまとこれ而不思とてる早計の
人は悔あん況や奥の細道をのおもに
人をさはこそよる蹟と先をもつ者あれい
今ふ假名真名のそもりもておよまておなく
を一方事の假名かちよ今とく我とよりやまて

かをはちとこそ此をいつとく様とちとある
ちとを新度のいと所と為て張換をこ世文
よ秋の文章と論をへ湘南よ月日の辭
をとこて百世の文格も恥をんとも云と
墨におりい遺稿の大任ちるられとと秘の
秘訓とふ事つやは稿のあけくまいをは
年を此十月よ祖義い新度をて世を辭一
を人い武陵をおしをてる文章の文はい先師
の墨撰よ任を事ハ一をとはをはちの
ちあんを滅ねよをとあるとをとて武陵

の古をのかてとなるはの拾遺もこのことく
例のなをれの一子をもちたるまて歌仙をんを
仙人にて世をもてに書林をひろまるもちる
るもて傳仰の遺書もありてその師もたの
法をひろくそのゆ子あるたの奥屋をはらて
遺稿をひ下北宮議をんとやうるくの
廣狭を法をへ仰種をもて大ゆ子の接書をり
ひろもり傳書を七千二ゆの偏実をせをる
もをるもを遺書の虚実をんを例のおをれて
おをれ一をもを今北式目の角撰をもてを接い

ほして衆議をまくをちんや▲狂授をもに假名
をちひをもを和漢の助語北通用をもて假名
を真名をもをもりをこの彼子ゆ月見歌を文
格をもをもひ北ゆ大和詞を助語をもるまを也

真字式目之終